

大庭みな子

三匹の蟹

講談社

三匹の蟹

昭和四十三年十月四日 第一刷発行
昭和四十九年十一月二十八日 第五刷発行

著者——大庭みな子

発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号——一一二

電話——東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

振替——東京三九三〇

印刷所——豊国印刷株式会社

製本所——藤沢製本株式会社

定価は箱に表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

目次

構図のない絵

7

虹と浮橋

141

三匹の蟹

259

装帧
||
原弘

大庭みな子

三匹の蟹

構図のない絵

毎週木曜日の午後六時からあるセミナーは地下のボウマン氏の金工の教室であった。サキは何時も四時頃其処へ行った。見よう見真似で覚えた銀細工を四時から六時迄二時間ボウマン氏の金工の学生達に混ってやった。これはサキのヴィクター・ボウマンに対する礼儀みたいなものだった。彼女にはそういう律義なところがあった。セミナーのある六時から八時迄の二時間を除いて毎日十時半頃までは学生が自由に仕事が出来るように教室は解放されていた。描く方の教室はもう少し自由で十二時迄あいていたが、彫刻や金工は火を使うから責任者が交替で残っているの、十時半には追い出される。大抵、ヴィクター・ボウマン氏の助手のシモーヌが責任者で残っていた。四時頃行くとボウマン氏もまだ研究室に居ることもあったが、サキの姿が見えても出てくるということとはなかった。シモーヌの姿が大抵一緒にあった。

シモーヌは十年程前フランスからアメリカに一家で移って来て、国籍は未だ持っていないかったが永住権を持っていた。貧しい東洋人はみんな豊かなアメリカでの永住権を慾しがるか

らアメリカ人は用心して、恩着せがましく年間ほんのちよっぴりの粹しか認めない癖に、欧州の比較的豊かな国の国籍を持つ白人に対しては移住権の粹をずっとゆるくしていた。フランス人や英国人やスウェーデン人は簡単に永住権がとれた。

シモーヌは十二、三まではフランスで育ったから、色んなことをまだよく記憶していて、何かにつけてヨーロッパの優位を誇るようなことを言葉の端にのせて生粋のアメリカ人の学生達から陰口を叩かれていた。「そんなにフランスがいいのなら、さっさと帰ればいいのに」と女の子達は言った。Rのひびきすぎるアクセントの強い英語を喋り、それが可愛らしいと男の学生達には人気があった。その癖きまった男友達が仲々出来ないのはあまり熱心すぎるカトリックの信者だからという話だ。シモーヌは自分の受け持ち以外の学生のサキが其処へ来て仕事をするにあまり好意を持っていなかったが、ボウマン氏が認めている以上サキの氣分を害するのは損だと思っていた。しかし、サキが、普通鍵をかけた物置きにしまつてある道具類や薬品などを探している時、故意に氣がつかない風をして通り過ぎ、他の学生達なら親切に色々とり揃えてやるものを、揃えてやらない、というようなことはあった。その癖彼女はサキとヴィクターとの間を決定的なものとして匂わせるような風評を自分から立てるといふことは決してしなかった。そういうことを認めるのは我慢がならなかった。彼女はヴィクターの妻のソフィヤとも親しくしていたが、サキについて、それらしいことをソフィヤに匂わせたりするというようなことも決してなかった。

彼女が少し艶はよくないにしてもブロンドを黒く染めたのはブロンドの女が真黒な髪になったら、混血女みたいな妖しさが出てくるだろうというのがねらいだったが、彼女の金色の瞳と、明るい空色の眼はいくらマスカラを塗りつけても黒い髪には合わなかった。彼女が「わたし、髪を黒く染めようかしら」と呟いた時、一番強く賛成したのはサキだった。サキはシモーヌが自分に親切でないことを常々感じていたから機会があれば仕返しするつもりだった。「ミセス・ボウマンの黒い髪とブルーの眼って、とても素敵だと思わない？」とサキは附け加えた。ヴィクターの妻のソフィヤはシシリ島で、腫れ瞼で豊かな黒い髪を重そうに束ねていたが、三十をちょっと越したくらいなのにもう随分白髪があるのをサキは知っていた。そして黒い髪の癖に茶色の眼でなくて沈んだ青い眼を持っていた。「それにしただって」サキは思った。「あんなたわわな重たさなんぞ、どうして、シモーヌなんぞにありはしない」だからこそサキはシモーヌに髪を染めることを薦めたのだった。シモーヌはしばみ色のコンタクト・レンズを入れたのでしょつ中涙ぐんでいた。

五時過ぎになると駄弁るのを目的にセミナーの学生達が集って来た。美術評論を主とするセミナーは修士をとる為の学生達の必修の課程で十人程のグループであった。部屋の責任者のシモーヌがコーヒーの世話などした。シモーヌの専科は金工だったが、大学院はサキと同期だった。

黒人のエドが浮かない顔をして四時半過ぎから其処にじっと坐っていた。サキがそばに行

つても何時ものように喋りかけてこようとしなかった。彼はサキよりも一期早く、一ヵ月程前にした卒業個展の評判もよくて、二三ヵ月前油絵の部門でかなり権威のある賞をとった。彼は楽しい筈だった。

「ヘミシシッピーの焦点」はともいいわ」

サキはぼんやり机に肘をついて銀のブローチに鑢をかけている学生の仕事を気の無い顔で眺めているエドに声をかけた。それはエドが賞をとった絵のことだった。それは陰気な七色が今にもめらめらと燃え出しそうにゆらめいて、燦った黒い一つの点に集っていた。それはキャンヴァスの上でマゾヒスティックにのたうちまわる生き物に似ていた。

「黒い塊が、大きくなっていく、という恐怖があるのよ」

彼は離れて八の字に下った眉を泣き出しそうに下げて笑ったが、むくろじみたいなまんまいる黒い眼は少しも笑わず、赤い血の筋が絡んだ白眼をじっとサキにすえて言った。

「癌みたいだね」

彼は肩をすくめた。

「ああいう風なものから、具象的なものに発展していった、安定性を求めるっていう気持はあるのかしら」

「抽象的な表現派、行動派に故郷の無い浮動性があるっていうことは僕も気がついていよ。しかし具象的なものが説明的なものになる、という怖れはあるわけだから」

「黙じみた叫びがそのまま昇華されるってことある？ 怪物みたいなものになって。そういうものが欲しいと思わない？ わたしなんか、何方かといえど叫び出すより、沈んで行ってしまうのよ」

「君の絵はそうだね。でも、そういうものは自然のものでいいんじゃないか。僕だって沈みなくなったら、頭で藻掻かずに、沈むつもりだ。ただ、今の僕の場合、静的なものの中では噴き出すエネルギーがたたえられないような気がするんだ。だけど、サキ、僕も最近、若しかしたら、沈む方が楽だ、という気もするんだ。或いは其処に他の世界が見つかるかも知れない、というような気もするし、じゃなきゃあ、パリの絵みたいな粹な淡さ。南欧の楽しい洒落たファンタジイ、あんな風になれたらなあ、と思うんだ」

「アメリカの絵と、パリの絵じゃ、本質的に違うものがあると思うの。でも、あなたがあのひとたちの真似したら、それで満足していられて？ 色んなことに飽きてしまったひと達の切ない快樂と、あなたの叩きつけたようなものとはバランスがくずれてしまうだけよ。きつと、あんまり、虚しいものになるだけだわ」

「だけど、誰だって、時には沈みたくなるものなんだぜ。君なんか、時にはヒステリックなものが多い、っていう感じに走るけれど、全体としてはやはり平和に冥想しているっていう感じだろう。そういう優しい絵を見ると僕はとても羨ましくなるんだ。虚しさが分ったら、いっそ沈むか漂うかしてのんきに愉しくやったらいいじゃないか、っていうような気もする

んだ」

サキが抗議しようとするのに気づいて彼は慌てて遮った。

「君が樂をしている、という訳じゃない。それは天性のものなんだから。君は天性柔和なんだ——」

柔和という言葉にサキはとまどった。それはつまり人種的に限界のある菜食人種の柔和だということであろうか。だからサキは話を前に戻した。

「抽象的表現派はね、見ていて御覧なさい。いき場所が無くなるから。抽象的表現派は、ダイズミみたいなものに後戻りする可能性もあるわよ。じゃなきゃうんと理性的な幾何学的な図案みたいになるか、具象的な超現実派と一緒にになるか、そんなところだと思わない」

「だから、言ってるじゃないか、僕も最近沈みなくなっちゃって」

エドはサキを見上げて両手をうんと突っ張って欠伸をした。

「僕はね、サキ——」

エドは肩をすくめた。

「学校に残るの振られたよ。ダニエル・デュヴァルに決ったんだ」

サキはダニエルのアングル風な線の多いデッサンと彼の暗い灰色の眼を思い出した。彼の展覧会で心に残っているものといえば、そのたった一枚の気味の悪い腐った魚に抱きついた

女の鉛筆画と、彼の母親だという大層きれいな女だけだった。

「彼のデッサンはアカデミックだし、コムポジションも難の無いものだと思うよ——」

エドは嘲笑的に唇を歪めた。

「しかし、何よりも、彼は波打った栗色の毛と青白い肌を持っている」

「あなたが黒人だから振られたっていうの」

彼女は言ってしまったから声を呑んだが、エドは明るさをとり戻した。

「僕はそう思うことにするよ。その方が愉快だからね」

「じゃあ、わたしも不愉快なことがあったら、そう思っただけで自信を持つことにするわ」

サキが陽気に言くと、エドは急に意地悪い眼附きに戻って言った。

「いいさ。女には白人と結婚する、という手があるよ。例えばボウマン氏と」

そして、テッドが入って来た時、彼は早口に附加えた。

「ひとは、誰だって機会を利用する権利があるよ」

テッドは指にへばりついた粘土をこすり落としながらやって来た。エドは急に陽気な調子で最早サキの方は振向きもしないでテッドに言った。

「いよう、エピクロス、百弗どうやって工面したんだい。俺は割当の十弗をどうして作ろうかと舌打ちしてたんだ」

「エディブスと呼びたまえ。現代人はエピクロスの低俗な解釈しか出来ないからね。それに

眞の意味から言うとな俺はエビクロスのように保守的ではないんだ。百弗は女房の愛人がライフルを売ってこさえてくれたよ」

エドはテッドに近寄られて辟易した。ビートのテッドはあまりひどい匂いなのでみんなよけて通った。三ヵ月に一遍しかシャワーを浴びない、とかいう話だった。

「奴さんライフルなんか売れる年なのかい。御年十五歳だってきいたぜ」

「いや、別の愛人だ。そいつに売って貰ったんだ。大体元はといえば、そのライフルを買う時、俺が賞金を貰ったすぐあとで金があったから大分助けてやったんだ。だから今、何ももう恩に着ることはねえやな」

「複雑な系図は仲々頭に入らねえよ」

エドは苦笑した。テッドは教会で妻を交えた十人ばかりの男女学生で、ボンゴ・パーティーと称する乱痴気騒ぎをやって警察沙汰を起し、百弗の保釈金をつくるのに友人を片端から電話で呼び出していたのだ。みんなぶつぶつ言いながら、仕方がない、五弗ずつでも出してやるか、と言っていたが、少しじらした方が奴の身の為だといって二三日放っておいたのが、今朝ひょっこり学校に出てきたのだ。

「使ってもしねえ物置き代りの蜘蛛の巣だらけの部屋を使っただけで、何もそう事を荒立てることはねえじゃないか。第一教会側は知らなかったんだぜ。パトリールのポリが勝手に不法侵入でひったてたんだ。大体罪ってのは訴える者があるから成立するんだろ。寝床で女